

学生服に対する教師の態度

多々納 道子*

Michiko TATANO

Studies on the School Teachers' Attitudes to the School-Uniform

Abstract: The school teachers' attitudes to the school-uniform as it ought to be and the several controversial points caused by their guidances regarding the school-uniform to students were studied. The results obtained were as follows:

The school teachers (elementary school-, junior high school- and high school-ones) answered almost in the affirmative about the role of school-uniform, and few difference among these schools were recognized in their attitudes to the uniform.

It was found by a factor analysis that the attitude to the uniform were mainly composed of 5 factors (sensible-, educational-, functional-, disciplinary- and economical-one). Some few of the students except elementary school-ones were disaffected with uncomfortable school-uniform and the parents of elementary school-students had a lot of opinions on the functional- and economical-character of the uniform.

The teachers who threw their full support behind the school-uniform had emphasized their roles in educational- and functional-area.

1. 緒 論

児童・生徒の衣生活の中でも学生服は非常に大きなウエイトを持つ衣服と考えられる。そして、日本は制服志向の非常に強い国であるということ为背景として、この学生服は大多数の学校において制服として規定され、生活指導の一環として何らかの方法で教師によって指導されているのが現状である。したがって、教師が学生服をどのようにとらえているのかという教師自身の態度やそれを実際に指導する際の態度が、学生服のあり方およびその是非についての問題に大いに影響するものと考えられる。

そこで本研究では、既報における生徒と父兄を対象とした学生服のイメージ調査にひき続いて、教師を対象として学生服に対する態度と指導上の問題点を把握するとともに、児童・生徒の発達段階のちがいをすなわち小学校、中学校および高等学校においてこれらの点にどのような差異があるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 調 査

1) 調査対象

島根県においては、小学校から高等学校までのほとん

どの学校が制服を規定しているので、小学校、中学校および高等学校の教師265名を対象にしてアンケート調査を行った。そのうち、有効回収数は小学校教師54名（男20，女34），中学校教師60名（男40，女20），高等学校教師97名（男81，女16）の計211名であった。なおこれらの教師の年代は、20代20名，30代59名，40代99名，50代33名であった。

2) 調査時期

中学校教師は1979年3月中旬

小学校と高等学校教師は1979年5月中旬

3) 調査方法

質問紙法によった。学生服についての態度は、意見項目を出来るだけ多く収集するため、前報の調査や予備調査によって得られた項目を整理し28項目にまとめた。それぞれについて5段階評価をさせた。なお、28の意見項目は表1に示される通りである。

3. 結果および考察

回収した調査用紙は次の要領で分類し、比較検討を行った。

小学校教師……E群 高等学校教師……H群

中学校教師……J群

1) 学生服に対する態度

* 島根大学教育学部家政研究室

表1 学生服に対する態度の意見項目

1. 学生服は見た目がすっきりしており学生らしくてよいと思う
2. 画一的な学生服は、服装について考える機会を失くすので教育的でないと思う
3. 学生服は、その学校の伝統や校風を伝える手段として便利であると思う
4. 服装については、家庭教育に任せるべきであり、学校では規制しない方がよいと思う
5. 学生服は家庭の経済状態の差があらわれないので、教育上好ましいと思う
6. 自由な服装になると生活のけじめがつかなくなるので好ましくないと思う
7. 学生服は、気候にあった調節がどうしてもとりにくいのでよくないと思う
8. 学生服は学生という自覚をおこさせることが可能であるので望ましいと思う
9. 学生服は服装についての競争心を押えることに役立っていると思う
10. 学生服は、一般の衣服とかけはなれ、児童・生徒に異和感をおこさせるのでよくないと思う
11. 服装の乱れは心の乱れを示すので、児童・生徒の生活指導上の手がかりとして必要だと思う
12. 学生服は、10代の感受性の強い年代に画一的な服装を強制するので没个性的になる可能性があると思う
13. 学生服は、クリーニングの機会は少なく、発育途上の児童・生徒の衣服として非衛生的になるので好ましくないと思う
14. 自由な服装にすると、学校での児童・生徒の指導が大変だと思う
15. 学生服は、多様な目的をかなえうる衣服なので非常に経済的であると思う
16. 学生服は、児童・生徒に同一レベルで服装に対する認識を高める場を与えてくれるので望ましいと思う
17. 学生服は、児童・生徒の発育に合いにくいので好ましくないと思う
18. 学生服は、児童・生徒の服装が華美に流れることに一定のブレーキをかけるため好ましいと思う
19. 大勢の児童・生徒を統制するためには外見の服装の効果も大きいので、学生服はその点便利だと思う
20. 学校での服装を自由にすると非行化につながると思う
21. 学生服は画一的な服装をおしつけることになるので好ましくないと思う
22. 学生服は、学校での衣生活を規定しているので児童・生徒の反発を招き、指導しにくいと思う
23. 学生服はあってもよいが、色・デザイン・材質などもっと着心地のよいものに改良されるとよいと思う
24. 学生服使用によって、児童・生徒の衣生活を管理することはよいと思う
25. 学生服は、学校の様々の生活の場に応じてもっと多種類あるとよいと思う
26. 学生服は、不必要な学校差を強調することにもなるので好ましくないと思う
27. 学生服は、服装について考える機会を少なくするので、色彩感覚や服装認識の資質を貧しくさせると思う
28. 学生服と私服という二重の衣生活になるので、かえって不経済だと思う

小学校、中学校および高等学校の教師が学生服をどのようにとらえているのかの態度についての調査結果は表2に示される通りである。

表2によって高得点の項目と低得点の項目から学生服についての態度を明らかにした。まず高得点の項目からみると、「1学生服は見た目が学生らしい」「8学生という自覚をおこさせる」また「18華美に流れるのを防ぐ」「9競争心を押えることに役立つ」としており、そのため「11生活指導の手がかりとして必要である」というようにとらえているようである。次に低得点の項目より、「10学生服は別に異和感をおこさせない」「2教育的でないとはいえない」「4服装は家庭教育に任せて学校でやる必要はないとは思わない」ととらえられていた。以上のように、小・中・高の教師ともに態度に大きな差はなく、学生服のもつ性格を肯定的にとらえており、伝統的な衣服であるということもあって、学校の生活指導の中にきちんと位置づけようとしていることがうかがえた。そのため、「14自由な服装にすると学校での指導が大変になる」という項目の得点がかなり高いことから、学

生服があれば指導がしやすいということも十分考慮されているものと思われる。

しかし、学生服の効用は十分認めるが、それを構成する要素である「23デザイン・色・材質などもっと着心地のよいものに改良されることを希望する」という項目も同時に高い得点を示した。

以上のように、教師は全般的に学生服を肯定的にとらえ、また生活指導の手がかりとして把握していることがうかがわれた。一般的な衣服は、簡易化、自由化の方向に変化しているにもかかわらず、ほとんど変わらない学生服について着心地という観点からデザインを初めとする構成要素の変更を求めるものがかなり多かった。そして、小・中・高という児童・生徒の発達段階に基づく学校差はほとんどなかった。

さらにこれらの意見項目を要約するため、小・中・高の3群に対して Centroid 法による因子分析を行った。すなわち、28の意見項目を変量として各群に対して相関行列によって因子負荷量を算出し、基準 Varimax 法によって回転した。なお因子の数は固有値が1.0より大

表2 学生服に対する態度の意見項目の得点

群	E 群	J 群	H 群
項目			
1	4.22	4.43	4.16
2	2.22	2.11	2.22
3	3.40	3.34	3.52
4	2.20	1.93	2.13
5	3.55	4.08	3.60
6	3.59	3.84	3.83
7	2.79	2.52	2.74
8	3.92	4.03	3.88
9	3.85	3.95	3.71
10	1.88	1.75	2.06
11	3.88	4.18	4.06
12	2.16	2.13	2.47
13	2.51	2.51	2.68
14	3.61	3.84	3.86
15	3.52	3.96	3.79
16	3.37	3.54	3.29
17	2.50	2.38	2.62
18	3.96	4.11	4.01
19	3.85	3.84	3.77
20	3.09	3.16	3.29
21	2.14	2.31	2.42
22	2.01	2.17	2.28
23	3.98	3.75	3.93
24	3.50	3.59	3.46
25	2.90	2.85	3.06
26	2.16	2.38	2.55
27	2.31	2.33	2.61
28	2.31	2.24	2.49

表3 態度の因子負荷量 (J群)

因子	1	2	3	4
項目				
1	0.195	0.312	-0.014	0.748
2	-0.619	-0.244	-0.148	-0.144
3	-0.138	0.682	0.115	0.170
4	-0.621	-0.249	0.064	-0.369
5	0.192	0.128	-0.323	0.407
6	0.172	0.597	0.226	0.463
7	-0.352	-0.109	-0.373	-0.589
8	0.252	0.618	0.156	0.499
9	0.271	0.379	-0.232	0.607
10	-0.634	-0.118	-0.069	-0.313
11	0.251	0.671	-0.102	0.250
12	-0.804	-0.194	-0.093	0.018
13	-0.480	-0.033	-0.376	-0.146
14	0.248	0.715	-0.034	0.045
15	0.235	0.197	0.052	0.592
16	0.049	0.497	0.135	0.682
17	-0.554	0.033	-0.256	-0.559
18	0.417	0.421	-0.130	0.623
19	0.217	0.755	-0.118	0.158
20	0.174	0.647	0.221	0.299
21	-0.595	-0.291	-0.045	-0.435
22	-0.548	-0.377	-0.101	0.084
23	-0.069	0.006	-0.570	0.082
24	0.073	0.249	0.043	0.755
25	-0.118	-0.131	-0.655	-0.118
26	-0.399	0.058	0.182	-0.399
27	-0.607	-0.078	0.013	-0.363
28	-0.654	-0.013	-0.001	-0.525
寄与率	0.598	0.133	0.101	0.078

で累積寄与率が約90%になるように調べた。E群とJ群は第4因子、H群は第5因子までを採用し寄与率の大きい順に並べた。J群とH群については表3と表4に示される通りである。なお、E群はJ群とほとんど同じ傾向を示したので表は省略した。

まずJ群については表3に示されるように第1因子は「10学生服は児童・生徒に異和感をおこさせる」「12没个性的になる可能性がある」など因子負荷量の大きい項目から判断して、児童・生徒の学生服についての感覚的因子であり、寄与率が59.8%と最も大きかった。第2因子は「11児童・生徒の生活指導上の手がかかりとして必要」「14学校での児童・生徒の指導が大変」などに代表される教育的因子であった。第3因子は「23着心地のよいものに改良されるとよい」「25学生服はもっと多種類あるとよい」などに代表される機能的因子であった。第4因子は「9競争心を押える」「18華美に流れることにブレーキをかける」などに代表される規律的因子であっ

た。そしてこれら第4因子までで約90%が解釈できた。

次にH群の場合は表4より同様に解釈すると、第1因子は感覚的因子、第2因子は機能的因子、第3因子は規律的因子、第4因子は教育的因子、第5因子は経済的因子であった。

J群とH群を比較すると、第1因子は感覚的因子でも同じであった。そして寄与率が第2因子以下と比べて大きく、児童・生徒の学生服についての感覚的資質が重視されていることがわかった。第2因子以下は両群ではやや異なっていた。すなわち、J群は教育的な面が強く表われ、次いで機能的因子であり最後が規律的因子であった。これに対して、H群では教育的な面は後退して、機能的因子が強く、また年齢が上になれば必然的に衣服についての関心も高まり華美になりやすいので、経済的因子が登場してきたものと思われる。このことは、³⁾前報の学生服のイメージ調査においてファッション性をもった外観的因子の寄与率が最も大きかったことから

表4 態度の因子負荷量 (H群)

因子 項目	1	2	3	4	5
1	0.482	0.198	0.417	0.443	-0.206
2	-0.704	0.179	-0.034	-0.282	-0.039
3	0.299	0.113	0.141	0.477	-0.410
4	-0.523	0.064	-0.241	-0.545	-0.072
5	0.017	0.053	0.127	0.114	-0.669
6	0.256	0.083	0.658	0.203	-0.119
7	-0.496	0.393	-0.127	-0.358	0.383
8	0.427	0.059	0.305	0.620	-0.332
9	0.110	-0.044	0.253	0.743	-0.055
10	-0.532	0.102	0.165	-0.589	0.351
11	0.423	0.177	0.478	0.275	-0.427
12	-0.550	0.291	-0.282	-0.444	-0.138
13	-0.388	0.659	-0.204	-0.114	-0.126
14	0.141	0.002	0.747	0.232	-0.132
15	0.288	-0.157	-0.015	0.536	-0.278
16	0.148	-0.160	0.331	0.662	-0.124
17	-0.525	0.264	-0.075	-0.535	0.199
18	0.158	0.002	0.420	0.751	-0.113
19	-0.089	-0.308	0.455	0.344	-0.368
20	-0.095	-0.034	0.743	0.157	-0.102
21	-0.440	0.318	-0.259	-0.614	0.135
22	-0.446	0.097	-0.249	-0.371	-0.284
23	0.009	0.598	0.218	0.024	-0.262
24	0.164	0.009	0.425	0.174	-0.606
25	-0.121	0.612	0.010	-0.103	0.007
26	-0.646	0.099	-0.327	-0.033	0.274
27	-0.745	-0.012	-0.036	-0.286	-0.099
28	-0.095	0.175	-0.191	-0.065	-0.640
寄与率	0.572	0.133	0.073	0.068	0.067

理解できる。

このように両群で異なっていたのは、学生服を着用する生徒の発達段階を教師が考慮しており、その上で全体として学生服を中心とした衣生活指導が行われているという実態を表わしたものとしよう。

そして教師の場合は、やはり教育的配慮を十分行っておりそれが教育的因子としてあらわれたようである。また、生徒や父兄における調査において解釈できた因子とほぼ同じようなもので解釈でき、教師・生徒および父兄の3者とも非常に似かよったとらえ方をしていることが認められた。

2) 指導上の問題点

教師が指導を通して感じた児童・生徒と父兄の学生服に対する態度は表5に示される通りである。

表5より明らかなように学生服は児童・生徒に全般的に受け容れられており、不満をもちものがある程度で

表5 学生服に対する児童・生徒と父兄の態度 (%)

態度	教師群		
	E群	J群	H群
児童・生徒			
全体的に受け容れられている	90.7	70.0	76.5
時々不満をもちものがある	7.4	30.0	21.4
反抗的な態度をとるものがある	0	0	3.1
父兄			
意見や要望はあまりない	61.1	93.3	95.9
意見や要望は時々ある	33.3	6.7	1.0
意見や要望はよくある	1.9	0	0

反抗的な態度をとるものは極めて少なかった。しかし、小学生に比べて中学生と高校生は不満が多く、特に中学生が30%と最も多かった。そしてこの3群の間に違いがみられるかどうかについて、 χ^2 検定を行うと小学生と中学生、小学生と高校生の間に5%水準で有意差が認められた。したがって、小学生だけ異なっており中学生と高校生は大体同じ傾向にあることがわかった。

次に自由記述によると、これらの不満の内容はほとんどが男子のつめえり学生服のえりに関するものと、学生服でも着丈やデザインの異なる変型学生服を着用したがることによる服装規定そのものにたいく不満であった。これらに対して実際に行われた指導は、教師自身が学生服の意義やよさを述べて理解させる、あるいは生徒会を中心にして生徒自身に話し合わせたり、検査したりして規定を守らせることであった。そして、規定を変えたという学校は全くなかった。男子の学生服はつめえり学生服がほとんどで、しかも着心地の悪いものであるため不満が生じたものと思われる。しかし、抜本的な解決は行われていなかった。

また、小学生は学生服に限らず一般の衣服でも親から与えられて着用していることが多く、年齢的にもまだ衣対に服する意識が低いこともあって不満が少なかったのではないかと考えられる。

次に父兄の態度をみると、学生服についての意見や要望は小学生の父兄が33.3%と最も多く、中学生と高校生の父兄は少なかった。特に、高校生の父兄からは全くないといっても差しつかえない。これら3群の間に違いがあるかどうかについて χ^2 検定を行うと、小学生と中学生、小学生と高校生の父兄の間に5%水準で有意差が認められた。したがって、児童・生徒の反応と比較して父兄の場合は逆の傾向であるといえよう。これらのことは、児童・生徒が小学校から高等学校の間に衣生活について、与えられたものを着用する段階から、主体的に着用するようになっていくのに対し、父兄は学生服を当然のものとして受けとっていくようになることを示しているものと思われる。

さらに父兄の意見や要望の主なもの、学生服が身体の発育や気候の変化に合にくいなどの機能的なこと、および保健衛生上から薄着が奨励されていたりすると、学生服は通学時のみ着用することで、無駄になるなど経済的なことであった。そしてこれらの意見が特に多い学校では、児童や父兄の意見を調査するなど生徒指導部を中心に、学校全体で取り組みが行われていた。それによって学生服を廃止することはないが、着用の仕方を弾力的にするなどの改善が行われていた。

3) これからの学生服のあり方

教師がこれからの学生服のあり方をどのように考えているかについては表6に示される通りである。

表6 これからの学生服のあり方 (%)

意見項目	教師群		
	E群	J群	H群
現状のままでよい	20.4	46.7	41.8
着用の仕方を弾力的に行う	50.0	30.0	23.5
色・デザインなどの改良を行う	24.1	25.5	25.5
標準服などのように自由度をもたせる	14.8	1.7	13.3
廃止する	3.7	5.0	3.1

表6に示されるように、E群については「現状のままでよい」とするものは20.4%であり、「学生服の着用の仕方を弾力的に行う」が50.8%で最も多く、ついで「色・デザインなどの改良を行う」が24.1%であった。また「廃止する」というのは3.7%で非常に少なかった。このように「現状のままでよい」と考えていたのは約20%で、80%のものは何らかの変更を行った方がよいと考えていた。

J群とH群については、半数に近いものが「現状のままでよい」とし、ついで「着用の仕方を弾力的に行う」「色・デザインなどの改良を行う」となっており、何らかの変更を行った方がよいとするものは半数以上であった。これら3群については χ^2 検定で有意差が認められた。

このように、小学校において学生服を改良した方がよいと考えられていたのは1)で述べたように教師群の学生服についての態度にほとんど差のなかったことより、父兄の意見や要望が直接の動因になっているものと思われる。また、制服でなく標準服などのように自由度をもたせたり廃止するという考え方は、3群とも非常に少なく、制服志向が極めて強いと思われる。しかし、これに関連した自由記述によってその考え方をみると「個人的には制服はあまり賛成ではないが、学校という集団生活の場にはどうしても必要」とか「家庭で衣生活指導が十分行われなければ制服を廃止することは無理である」というように、学生服の集団生活での効用と学校での指導

の限界を述べているものが少なくなかった。したがって、学生服は現代生活の感覚とずれて着心地など問題点はあるものの、集団生活を営む上でそれに依存せざるをえない現状であるといえよう。

さらに、学生服についての態度では教育的因子が大きな寄与を示したことを考えると、衣生活の面で学校教育の果している役割の大きいこと、言い換えると日本の学校は生活指導を含めて多面的な教育的機能を持っていることが理解できた。

また特に、J群とH群は学生服のこれからのあり方について「現状のままでよい」とするもの(A群とする)と「何らかの変更をした方がよい」とするもの(B群とする)の2群に大きくわかれた。そこで、これら2群の差はどのような態度の意見項目によってわかれるのか、また因子分析によって要約できた因子とどのような関連があるのかを明らかにしようとした。そのため、28の意見項目を2群に分けてt検定を行った。結果は表7に示される通りである。なお、有意性のない項目は省略した。

表7より明らかなようにJ群は10項目、H群は18項目について1%あるいは5%水準で有意差があり、はっき

表7 これからの学生服のあり方と態度との関連

項目	中 学 校			高 等 学 校		
	A	B	t	A	B	t
1				4.51	3.93	※
2	1.78	2.40	※	1.93	2.45	※
3				3.88	3.28	※
4				1.76	2.41	※
6	1.89	3.40	※※	4.12	3.63	※
7				3.93	2.96	※※
8				4.24	3.61	※
9				4.07	3.45	※
10				1.64	2.32	※
11	4.46	3.93	※			
12				3.90	2.77	※※
13				2.39	2.89	※
16	3.96	3.15	※			
17	2.10	2.62	※	2.27	3.03	※
18	4.32	3.87	※	4.37	3.75	※
19	4.31	3.65	※			
20	3.50	2.84	※			
21				2.00	2.73	※
23	3.32	4.12	※	3.68	4.09	※
24				3.76	3.25	※
25	2.39	3.25	※	2.73	3.30	※
26				2.17	2.78	※

※……P<0.05 ※※……P<0.01

りと態度に差がみられた。まず、J群について有意差のあった10項目をみると、教育的因子と機能的因子に属するものが多く、「現状のままでよい」とするものは「何らかの変更を行った方がよい」ものに比べて学生服をより教育的、機能的であるととらえていた。

次にH群について18項目は感覺的因子、機能的因子、規律的因子、教育的因子に属するものが多くやはり「現状のままでよい」とするものは上記の各因子について肯定的にとらえていることがわかった。そしてJ群とH群を比較するとH群の方が学生服のあり方について多方面からとらえて結論を出していることが認められた。

4. 要 約

学生服について、それを指導する立場にある小・中・高の教師を対象として、学生服を教師がどのようにとらえているかという教師自身の態度と実際の指導によって起る問題点を明らかにした。その結果は次の通りである。

1) 学生服についての態度は、小・中・高の教師ともに差はなく肯定的にとらえていた。

2) 態度の因子分析により、小・中学校の教師においては感覺的因子、教育的因子、機能的因子、規律的因子の4因子、高校教師においては経済的因子を加えた5因子にまとめられた。中でも感覺的因子の寄与率は最も大きかった。

3) 教師に感じられた児童・生徒と父兄の学生服の態度について、中・高の生徒は着心地についての不満が多く、小学生の父兄は機能性や経済性について意見や要望が多かった。

4) これからの学生服については、小学校の教師では約80%、中・高校の教師では約50%のものが「何らかの変更を行った方がよい」と考えていた。そして「現状のままでよい」とするものは特に、機能的因子、教育的因子に関する点で態度が異なっていた。

本研究を終えるにあたり、調査にご協力いただいた関係諸学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

引 用 文 献

- 1) 柳洋子：流行の構造，文化出版局，101（1978）
- 2) 松浦道子：島根大学教育学部紀要10，29（1976）
- 3) 松浦道子，藤井真理：家政誌29，94（1978）